

日本語版Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の 保育者評価

Nursery staff assessment of children with Japanese version
of Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)

西村 智子

小泉 令三

Tomoko NISHIMURA
(北九州市八幡東区役所)

Reizo KOIZUMI
(教職実践講座(教職大学院))

(平成21年9月30日受理)

Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) は、広汎性発達障害やAD/HD、行為障害などについての信頼性の高いスクリーニング法であり、イギリスを中心としたヨーロッパ圏で使用されている。しかし、日本語版では他児との関わりなど社会的な場面の観察機会が多い教師・保育者評価が標準化されていないといった問題がある。そこで、日本語版SDQでの保育者の評価の採点基準を検討するため、幼稚園・認可保育所62ヶ所に勤務する年中・年長児の担任142名に対して、担任している園児(障害児を除く)1999名について回答を求めた。その結果、確認的因子分析により、日本語版SDQの保育者評価においても英語のオリジナル版と同様の5因子構造が確認され、保育者もSDQが利用できることが確認された。各サブスケールの得点分布より、保育者は多動性に注目しやすく、また向社会性を控え目に評価する傾向がうかがわれた。さらに保育者が「気になる」子は、有意に支援の必要性が高かった。

キーワード SDQ, 幼児, 「気になる」子, 発達障害, スクリーニング法

問題と目的

平成17年に発達障害者支援法が施行され、市町村は母子保健法に基づく健康診査を行うにあたり発達障害の早期発見に十分留意しなければならないと規定されていることから、従来の乳幼児健診等のあり方の見直しが行われている。そのため、先進的な自治体では1歳6ヶ月健診や3歳児健診の問診項目を見直し、発達障害の早期発見ができるよう工夫している。しかし、注意欠陥・多動性障害(AD/HD)や高機能広汎性発達障害の幼児では、3歳児健診のあと、保育所や幼稚園で集団生活をするようになって初めてさまざまな問題行動が目につくようになるため、3歳児健診を最終とする現行の乳幼児健診では充分対応できていない可能性が指摘されている。そのため、先進的な自治体では5歳児健診が実施され成果をあげてい

る。しかし、5歳児健診を行うにあたって人口規模の大きな都市では、保健師等のマンパワーと専門医の確保の困難さ、コストの問題がある。そこで、悉皆の健診ではなく、発達相談として実施されている場合があるが、発達相談では発達障害への気づきは悉皆の健診の1/6にとどまると指摘されている(小枝・下泉・林・前垣・山下, 2006)。そこで、発達障害の疑いのある子どもを保育所等でスクリーニングできれば、その子どもたちを対象に健診を実施することでマンパワーやコストの問題を軽減し、効率的に実施できるのではないかと考える。

発達障害のスクリーニングとして、小枝ら(2006)は、就学前の発達障害児を簡単に診断・鑑別できるような質問紙はないが、イギリスを中心としたヨーロッパ圏では、Strength and

Difficulties Questionnaire (以下SDQ) (Goodman, Ford, Simmons, Gatward & Meltzer, 2000) が使用されていると紹介している。SDQは適用年齢4歳～16歳の質問紙で、11歳未満は保護者、教師・保育者が評定し、11歳以上は自己記入できる、子どもの行動のポジティブな面とネガティブな面を評価するための信頼性の高いスクリーニング法である (Matsuishi et al., 2008)。SDQは、広汎性発達障害やAD/HD、行為障害などと関連があるとされており (Goodman et al., 2000)、臨床的な有用性は子どもの精神医学と心理学の分野で確立されている (Matsuishi et al., 2008)。SDQは発表後いくつかの言語に翻訳され、現在ではウェブサイトから40以上の言語に翻訳されたものが無償でダウンロードできる。このため世界各国での研究が進められ、日本語版では、保護者評価での標準化が試みられている (Matsuishi et al., 2008)。しかし、他児との関わりなど社会的な場面の観察機会が多い教師・保育者評価が標準化されていないといった問題がある。

これらのことから、本研究はSDQを5歳児健診等に利用するため、日本語版での保育者の評価の採点基準を検討することを目的とする。

方法

調査対象

A市内の幼稚園・認可保育所252ヶ所のうち協力の得られた62ヶ所 (幼稚園25, 認可保育所37) と、市外の大学附属幼稚園1ヶ所の年中・年長児の担任142名に対して、担任している園児 (障害児を除く) 1999名について回答してもらった。表1に年齢別と男女別の内訳を示した。

調査内容

SDQは、25項目で構成される行動スクリーニング質問紙である。25項目のそれぞれは、あてはまらない (0点)、まああてはまる (1点)、あてはまる (2点) で採点され、25項目のうち10

項目は逆転項目のため採点時に逆転させる。5項目ずつで構成されるサブスケールは、①行為面、②多動性、③情緒面、④仲間関係、⑤向社会性の5つであり、1つのサブスケールの点数は0～10点となる。各サブスケールの項目の内容は、①行為面は、「カッとなったたり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある」や「素直で、だいたい大人のことをよくきく」、「よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする」など、②多動性は、「おちつきがなく、長い間じっとしてられない」や「いつもそわそわしたり、もじもじしている」、「すぐに気が散りやすく、注意を集中できない」など、③情緒面は、「頭がいたい、お腹がいたい」など、体調不良をよくうったえる」や「心配ごとが多く、いつも不安なようだ」、「おちこんでいずんだり、涙ぐんでいたりすることがよくある」など、④仲間関係は、「一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い」や「仲の良い友達が少なくとも一人はいる」、「他の子供達から、だいたい好かれているようだ」など、⑤向社会性は、「他人の心情をよく気づかう」や「他の子供たちと、よく分け合う」、「誰かが傷ついたり、怒っていたり、気分がわるい時など、すすんで手をさしのべる」などである。また、①～④の合計をTotal Difficulties Score (以下TDS) とし、点数は0～40点となる。⑤向社会性はポジティブな面を評価している。サブスケールとTDSは、点数により支援の必要性をHigh Need, Some Need, Low Needと判断する。

また、調査対象園児のうち、障害児以外で保育者にとって保育が難しいと考えられている子どもで、保育をすすめる上で「気になる」点があり、特別の配慮を必要としている子どもを「気になる」子としてSDQの調査前に尋ねた。

手続き

保育者に通し番号をつけた調査対象園児全体的な名簿を作成してもらい、その中で「気になる」子

表1 調査対象園児内訳

| 年齢 | 男 | | 女 | | 不明 | | 合計 | % |
|----|-----|-------|------|-------|----|-------|------|-------|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | | |
| 4歳 | 160 | 16.5 | 145 | 14.1 | 1 | 100.0 | 306 | 15.3 |
| 5歳 | 483 | 49.8 | 527 | 51.3 | 0 | 0.0 | 1010 | 50.5 |
| 6歳 | 327 | 33.7 | 355 | 34.5 | 0 | 0.0 | 682 | 34.1 |
| 不明 | 0 | 0.0 | 1 | 0.1 | 0 | 0.0 | 1 | 0.1 |
| 合計 | 970 | 100.0 | 1028 | 100.0 | 1 | 100.0 | 1999 | 100.0 |

表2 保育者評価によるSDQの探索的因子分析結果

| | I | II | III | IV | V | 共通性 |
|------------------------------------|-------|------|------|------|------|------|
| 因子Ⅰ 向社会性 | | | | | | |
| 9 誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思っている | -0.90 | | | | | 0.67 |
| 1 他人の気持ちをよく気づかう | -0.83 | | | | | 0.68 |
| 20 自分からすすんでよく他人を手伝う | -0.78 | | | | | 0.56 |
| 17 年下の子どもたちに対してやさしい | -0.72 | | | | | 0.50 |
| 4 他の子どもたちと、よく分け合う | -0.66 | | | | | 0.56 |
| 因子Ⅱ 多動性 | | | | | | |
| 2 おちつきがなく、長い間じっとしてられない | | 0.90 | | | | 0.76 |
| 15 すぐに気が散りやすく、注意を集中できない | | 0.89 | | | | 0.76 |
| 25 ものごとを最後までやりとげ、集中力もある | 0.34 | 0.56 | | | | 0.61 |
| 10 いつもそわそわしたり、もじもじしている | | 0.56 | 0.26 | | | 0.46 |
| 21 よく考えてから行動する | 0.41 | 0.54 | | | | 0.60 |
| 因子Ⅲ 情緒面 | | | | | | |
| 16 目新しい場面に直面すると不安ですがりついたりすぐに自信をなくす | | | 0.69 | | | 0.51 |
| 8 心配ごとが多く、いつも不安なようだ | | | 0.64 | | | 0.43 |
| 24 こわがりで、すぐおびえたりする | | | 0.58 | | | 0.36 |
| 13 おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある | | | 0.56 | 0.24 | | 0.36 |
| 3 頭がいたい、お腹がいたい、気持ちが悪いなどと、よくうたえる | | | 0.31 | 0.27 | | 0.17 |
| 因子Ⅳ 行為面 | | | | | | |
| 12 よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする | | | | 0.77 | | 0.63 |
| 5 カツとなったり、かんしゃくを起こしたりすることがよくある | | | | 0.59 | | 0.44 |
| 18 よくうそをついたり、ごまかしたりする | | | | 0.50 | | 0.34 |
| 22 家や学校、その他から物を盗んだりする | | | | 0.26 | | 0.07 |
| 7 素直で、だいたい大人のいうことをよくきく | 0.38 | | | 0.26 | | 0.47 |
| 因子Ⅴ 仲間関係 | | | | | | |
| 11 仲の良い友だちが少なくとも一人はいる | | | | | 0.69 | 0.46 |
| 6 一人であるのが好きで、一人で遊ぶことが多い | | | | | 0.66 | 0.43 |
| 23 他の子どもたちより、大人というほうがうまくいくようだ | | | | | 0.48 | 0.30 |
| 14 他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ | 0.33 | | | | 0.41 | 0.43 |
| 19 他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする | | 0.23 | | | 0.20 | 0.17 |
| 因子寄与 | 5.57 | 5.08 | 2.14 | 3.35 | 2.99 | |
| 因子間相関 | | | | | | |
| II | 0.59 | | | | | |
| III | 0.08 | 0.18 | | | | |
| IV | 0.40 | 0.51 | 0.04 | | | |
| V | 0.44 | 0.36 | 0.31 | 0.29 | | |

注) 因子負荷量は、絶対値.20以上を示した。

表3 信頼性係数及び年齢との相関関係

| | 合計 (N=1998) | 男 (N=970) | 女 (N=1028) | 月齢 |
|--------|-------------|-----------|------------|----------|
| TDS 得点 | 0.85 | 0.84 | 0.83 | -0.05 * |
| 情緒面 | 0.69 | 0.68 | 0.71 | -0.03 |
| 行為面 | 0.70 | 0.70 | 0.69 | 0.00 |
| 多動性 | 0.87 | 0.86 | 0.83 | -0.09 ** |
| 仲間関係 | 0.67 | 0.70 | 0.62 | 0.04 |
| 向社会性 | 0.87 | 0.86 | 0.86 | 0.05 * |

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 保育者評価によるSDQの確認的因子分析結果

| | 向社会性 | 多動性 | 情緒面 | 行為面 | 仲間関係 |
|------------------------------------|-------|------|------|------|------|
| 1 他人の気持ちをよく気づかう | 0.83 | | | | |
| 4 他の子どもたちと、よく分け合う | 0.74 | | | | |
| 9 誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしている | 0.81 | | | | |
| 17 年下の子どもたちに対してやさしい | 0.70 | | | | |
| 20 自分からすすんでよく他人を手伝う | 0.72 | | | | |
| 2 おちつきがなく、長い間じっとしてられない | | 0.83 | | | |
| 10 いつもそわそわしたり、もじもじしている | | 0.60 | | | |
| 15 すぐに気が散りやすく、注意を集中できない | | 0.87 | | | |
| 21 よく考えてから行動する* | | 0.72 | | | |
| 25 ものごとを最後までやりとげ、集中力もある* | | 0.75 | | | |
| 3 頭がいたい、お腹がいたい、気持ちが悪いなどと、よくうたえる | | | 0.32 | | |
| 8 心配ごとが多く、いつも不安なようだ | | | 0.64 | | |
| 13 おちこんでずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある | | | 0.52 | | |
| 16 目新しい場面に直面すると不安ですがりついたりすぐに自信をなくす | | | 0.72 | | |
| 24 こわがりで、すぐおびえたりする | | | 0.60 | | |
| 5 カツとなったり、かんしゃくを起こしたりすることが良くある | | | | 0.66 | |
| 7 素直で、だいたい大人のいうことをよくきく* | | | | 0.67 | |
| 12 よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする | | | | 0.69 | |
| 18 よくうそをついたり、ごまかしたりする | | | | 0.55 | |
| 22 家や学校、その他から物を盗んだりする | | | | 0.19 | |
| 6 一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い | | | | | 0.54 |
| 11 仲の良い友だちが少なくとも一人はいる* | | | | | 0.61 |
| 14 他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ* | | | | | 0.66 |
| 19 他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする | | | | | 0.36 |
| 23 他の子どもたちより、大人というほうがうまくいくようだ | | | | | 0.48 |
| 因子間相関 | | | | | |
| 多動性 | -0.62 | | | | |
| 情緒面 | -0.20 | 0.23 | | | |
| 行為面 | -0.62 | 0.71 | 0.10 | | |
| 仲間関係 | -0.57 | 0.49 | 0.37 | 0.45 | |

*逆転項目

GFI=.866,AGFI=.835,RMSEA=.075,AIC=3357.573

表5 保育者評価によるSDQの平均値と性差

| | 合計(N=1998) | | 男(N=970) | | 女(N=1028) | | t 値 df=1996 | |
|--------|------------|------|----------|------|-----------|------|----------------|------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | 平均 | SD | | |
| TDS 得点 | 7.33 | 5.91 | 9.04 | 6.20 | 5.73 | 5.14 | 12.96 | **** |
| 情緒面得点 | 1.33 | 1.81 | 1.37 | 1.83 | 1.29 | 1.78 | 0.99 | |
| 行為面得点 | 1.41 | 1.87 | 1.83 | 2.03 | 1.02 | 1.60 | 9.90 | **** |
| 多動性得点 | 3.35 | 2.95 | 4.42 | 3.07 | 2.34 | 2.43 | 16.72 | **** |
| 仲間関係得点 | 1.24 | 1.64 | 1.42 | 1.79 | 1.07 | 1.46 | 4.66 | **** |
| 向社会性得点 | 6.07 | 2.84 | 5.29 | 2.85 | 6.80 | 2.64 | 12.25 | **** |

**** p < .0001

表6 保育者評価によるSDQのサブスケール間の相関関数

| | 行為面 | 多動性 | 仲間関係 | 向社会性 |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 情緒面 | 0.10 ** | 0.21 ** | 0.24 ** | -0.14 ** |
| 行為面 | | 0.54 ** | 0.33 ** | -0.50 ** |
| 多動性 | | | 0.40 ** | -0.58 ** |
| 仲間関係 | | | | -0.43 ** |

** $p < .01$

どもに印をつけてもらった。その後、保育者にSDQを郵送し、記入後返送してもらった。SDQには、年齢（月齢）と最初に作成した名簿の通し番号を記入してもらい、「気になる」子の照合は研究者側がこの通し番号を用いて行った。

分析方法

統計解析ソフトSPSS 10.0 j 及びAmos 4（エス・ピー・エス・エス株式会社）を用いた。

結果

因子構造と内部一貫性

SDQの25項目の因子構造を明らかにするために、主因子法・プロマックス回転で探索的因子分析を実施した。その結果、英語版と同様に5因子構造となっており、各因子を構成する項目の内訳も英語版とほぼ同様であった（表2）。

内部の一貫性を明らかにするためにCronbachの α 係数を全体と男女別に計算した。TDSは、20項目で $\alpha = .85$ であり、各サブスケールも表3のとおりであって、一貫性は高かった。Matsuishi et al. (2008)で、仲間関係（ $\alpha = .52$ ）と行為面（ $\alpha = .52$ ）において α 係数が低かったことに比べても高かった。

しかし、「7素直でだいたい大人のいうことを聞く」、「14ほかの子どもたちから、だいたい好かれているようだ」、「21よく考えてから行動する」、「25ものごとを最後までやりとげ、集中力もある」は、向社会性の因子への負荷が見られた。Matsuishi et al. (2008)では、項目7と14が向社会性に負荷していたが、本研究では、それに加え項目21と25も向社会性に負荷がみられた。

SDQ項目の確認的因子分析

25項目が先行研究通りの5因子構造となることを確かめるために、逆転項目の処理を行った後で、AMOSを用いた確認的因子分析を行った。5つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、適合度指標はGFI=.866 AGFI=.835, RMSEA=.075, AIC=3357.573であった。また、すべての因子間の相関は $p < .001$ で有意であった（表4）。

SDQの得点とサブスケールの相関関係

表5にTDSと各サブスケールの平均値と標準偏差および性差の検定結果を示した。日本語版の保護者評定ではTDSと行為面、多動性、仲間関係の

表7 保育者評定による新採点基準と保護者評定による基準との比較

| | Low Need | | Some Need | | High Need | | | | |
|------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------|------|-------|
| | 保育者 評定 | 保護者 評定 | 保育者 評定 | 保護者 評定 | 保育者 評定 | 保護者 評定 | | | |
| | 素点 | % | 素点 | 素点 % | 素点 | 素点 % | | | |
| TDS | 0-12 | 81.6 | 0-12 | 13-16 | 9.8 | 13-15 | 17-40 | 8.6 | 16-40 |
| 情緒面 | 0-3 | 87 | 0-3 | 4 | 5.9 | 4 | 5-10 | 7.2 | 5-10 |
| 行為面 | 0-3 | 85.2 | 0-3 | 4 | 5.9 | 4 | 5-10 | 8.9 | 5-10 |
| 多動性 | 0-6 | 82.5 | 0-5 | 7 | 5.2 | 6 | 8-10 | 12.4 | 7-10 |
| 仲間関係 | 0-3 | 90.1 | 0-3 | 4 | 4.7 | 4 | 5-10 | 5.2 | 5-10 |
| 向社会性 | 5-10 | 73.2 | 6-10 | 3-4 | 13.6 | 5 | 0-2 | 13.2 | 0-4 |

(注) 保護者評定は Matsuishi et al.(2008)による。

表8 「気になる」子別の支援の必要性判断結果

| | 要支援 | % | 支援不要 | % | 合計 |
|---------|-----|-------|------|-------|------|
| 気になる子 | 139 | 69.8% | 60 | 30.2% | 199 |
| 気にならない子 | 228 | 12.7% | 1572 | 87.3% | 1800 |
| 合計 | 367 | 18.4% | 1632 | 81.6% | 1999 |

(注) 要支援=High Need+Some Need、支援不要=Low Need

平均得点は男が有意に高く、情緒面、向社会性では、女が有意に高いことが報告されている(Matsuishi et al., 2008)。しかし、本研究では情緒面では男女の平均得点に有意な差は見られなかった。

また、5つのサブスケールのそれぞれの相関関係は、表6のとおりであった。

採点基準の検討

SDQでの支援の必要性の判断基準の決め方を、英語のオリジナル版と同様にSome NeedとHigh Needが各々約10%になるようにした。採点基準を検討した結果、表7のようになった。違いが見られたところに注目すると、保護者評価では、多動性のHigh Needは7~10点であり、保育者(8~10)の方が多動性に関して高得点に分布する傾向がみられた。すなわち、保育者は多動性により注目しやすいといえる。反対に、向社会性では保護者評価はLow Needが6~10点であり、保育者(5~10点)の方が園児の向社会性を控え目に評価している傾向がうかがわれた(表7)。

支援の必要性

SDQを用いた新基準での支援の必要性は、Low Needが1632人(81.6%)、Some Needが196人(9.8%)、High Needが171人(8.6%)となった。Low Needを支援不要、Some NeedとHigh Needを要支援とし、「気になる」子とのクロス集計をし、残差分析を行った。その結果、「気になる」子の69.8%と「気にならない」子の12.7%が要支援となり、「気になる」子に有意に要支援が多かった($p<.0001$) (表8)。

考察

日本語版の保育者評価においても英語のオリジナル版と同様の5因子構造が確認され、保育者においてもSDQが利用できることが確認された。また、保護者に比べ保育者は、多動性の問題に注目しやすい傾向にあり、向社会性については保護者より向社会性を控え目に感じていることがわかった。

SDQは、高機能広汎性発達障害やAD/HD、行為障害などと関連があるとされており、5歳児に実施することで発達障害の疑いのある子どもを抽出することができると考えられる。そして、悉皆の健診が難しい場合に実施し、その結果要支援となった子どもたちに対して健診や発達相談を勧めていくことで、保育者や保護者等の発達障害への気づきを高めていけるのではないかと思われる。

また、保育者の「気になる」子の中には発達障害と診断される子どもが含まれているとの指摘がある(本郷・飯島・平川・杉村, 2007)が、SDQを使用すれば保育者の「気になる」点を数値化して表すことができ、支援が必要と考えられる子どもに関する情報を簡便に伝達する手段になると考えられる。たとえば、子どもの状態について保護者と保育者が共通理解を図るために、保育者と保護者がSDQという同一のツールを使用して子どもについて評価し、話し合うために利用できるのではないかと考える。受診を促したり、療育や園・学校での対応、その他社会資源や支援の活用について話し合う際、保育者等の関係者が子どもの問題に気づきながら、保護者が気付いていないといった認識のずれから、保護者に遠慮したり、保護者との意見の一致が得られず、効果的な対応が遅れることがある(堀口・宇野, 2006)。堀口・宇野(2006)は、「学習の遅れ」を主訴とした小学生を対象にした研究で、教育者側と保護者の子ども理解のずれを指摘している。この研究の中で教育者側と保護者が共通した調査票に記入することで、保護者は注意の障害、多動性、衝動性、学習の遅れを、そして教育者側は対人的なコミュニケーション能力の問題を認識しやすく、保護者と教育者側のずれが生じていることを明らかにしている。そして、同一の調査票に教育者側と保護者とがそれぞれに記入した際、調査票の回答がどの項目で一致しなかったのか話し合う場面が多く観察されている。

このことから、このような認識のずれの解消を図り対象児に対する共通理解を図るためには、保

護者面談等の時間を利用して保育者と保護者が共通した評価票を使用して話しあうことが有効ではないかと考える。このような取り組みは弓削・全(2007)の幼児期後半の母子保健サービスに対するニーズ調査でも、保護者から「園生活について担任の先生と一緒に発達について考えたい」「育児相談できる機会が欲しい」といった要望が出されていることから有効であると考えられる。

また、就学時に保幼小連絡会が行われているが、片桐(2007)は小学校側からは、「幼稚園・保育所から情報が伝わってこない」、幼稚園・保育者側からは「情報を引き継いでも、小学校で活用できていない」ということばが聞かれ、連携がうまくいっていないとの指摘がある。保幼小連絡会といった限られた時間の中で、SDQは「気になる」子の状態を的確に伝えるツールとしても利用できるのではないかと考える。

引用文献

- Goodman R., Ford T., Simmons H., Gatward R., & Meltzer H. (2000). Using the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) to screen for child psychiatric disorders in community samples. *British Journal of Psychiatry*, **177**, 534-539.
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子・杉村僚子(2007). 保育の現場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果. *LD研究*, **16**, 254-264.

堀口寿広・宇野彰(2006). 特別支援教育と医療の連携—保護者と教育側の子ども理解の「ズレ」—. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, **6**, 71-82.

片桐俊男(2007). 教育行政の立場から見た就学前支援の現状と課題. *LD研究*, **16**, 298-305

小枝達也・下泉秀夫・林隆・前垣義弘・山下裕史郎(2006). 軽度発達障害児に対する気づきと支援マニュアル. 平成18年度厚生労働科学研究「軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究」

Matsuishi T., Nagano M., Araki Y., Tanaka Y., Iwasaki M., Yamashita Y. et al. (2008). Scale properties of the Japan version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain & Development*, **30**, 410-415.

弓削マリ子・全有耳(2007). 5歳児モデル健診に取り組んで. *LD研究*, **6**, 273-281.

付記・謝辞

本研究は、第1著者が平成20年度に福岡教育大学大学院教育学研究に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。調査にご協力いただいた方々に心より感謝いたします。